W・E・B・デュボイスと日本

竹本友子

はじめに

W・E・B・デュボイス(William E. B. Du Bois)が生まれたのは、自ら述べているように「日本で、明治天皇が即位した」一八六八年であり、世を去ったのは一九六三年のことである。[1] このように彼の生涯は、明治維新という近代日本の出発点から、いわゆる高度成長期に至る日本の百年の歩みとちょうど重なりあっている。ペリーの率いる合衆国艦隊によって長い鎖国状態に終止符を打たれ、国際社会の一員となった日本は、西欧列強による植民地化を免れ、富国強兵策によって近代化の実をあげる。しかし、第一次世界大戦の頃には世界経済の中心国となっていた合衆国とは、移民問題での軋轢に加え、日本の大陸進出をめぐって衝突するようになり、ついには太平洋戦争へと至る。

このような日米関係の歴史は、合衆国の黒人指導者デュボイスにも、この極東の有色人国家に強い関心を向けさせることになった。結論的に言えば、デュボイスの対日観は一貫してきわめて好意的なものであり、日米間の敵意が強まってからも、デュボイスは日本の立場への理解と同情を表明し続けた。

デュボイスの好意的な対日観は、根本的には日本が有色人国家であることに由来し、その意味では彼の人種主義的傾向の顕著な表れということができる。彼は、NAACPの創設に参加する以前のアトランタ大学等での学究生活、すなわち一八九四年から一九一〇年春までの時期を回想して、次のように述べている。

「とりわけそれは帝国の時代であり、私は社会研究への科学的アプローチを行うための若干の知識は備えていたものの、世界を支配しつつあったあの植民地帝国主義について、何ら明確な概念を持っていなかったし、その意味も把

握していなかった。その意味を把握し、それに関してさらに有益な研究をするための私の唯一の接近方法は、人種の接触への私の関心を通じてのものであった。その関心によって、私の視界は明るくなり、世界を押し流す出来事の連鎖を解明できるようになった。[2]」

デュボイスの人種を基軸にした世界観は、一方でパン・アフリカ運動への貢献へとつながったが、他方で明らかに歪んだ対日観をも生み出した。デュボイスの研究史において彼の対日観がとりたてて問題とされることはなかったが、彼の人種主義の深さと広がりを考える上でも、またしばしばその思想のパラドックスを指摘され、「彼は少なくとも二重の生を送」ったと評されるデュボイスの複雑な内面を理解する上でも、彼の人種へのこだわりの所産である対日観を検討してみることは無意味ではなかろう。[3] デュボイスの対日観を規定した諸要素を分析し、同時期における日本の対米観や公式のプロパガンダ、とりわけ人種をめぐるそれと突き合わせることによって、合衆国の一人の黒人指導者と軍国主義日本との接点が浮かび上がってくるであろうし、デュボイスの対日観が、日本の側から見てどのような意味を持っていたのかが明らかになろう。

本稿は、以上の点を、デュボイスの日本訪問を中心に考えようとするものである。

一

デュボイスは、一九三六年六月から三七年一月にかけ、七ヵ月に及ぶ世界旅行を行った。大恐慌下で彼が提起した「自主的分離」（self-segregation）構想をめぐってNAACP幹部と決裂し、NAACPから脱退、アトランタ大学に復帰して間もない頃である。マラブルによれば、オーベレンダー・トラストが費用の多くを負担したもので、名目的にはドイツ・オーストリアの学校制度の調査ということであったが、デュボイスは、これを利用して緊迫の度を加えつつあった世界情勢を自らの目で確かめようと考えたらしい。旅程は、イギリス、フランス、ベルギー、オーストリアを経てドイツに五ヵ月間滞在し、ポーランドを経由してソビエト連邦に入り、さらにシベリア大陸を横断して、満州、中国を経て日本に立ち寄り、ハワイ経由で帰国するというものであった。[4] 来日は十二月二日のことで、以後二週間にわたって滞在することになるが、この間のデュボイスの行動を、帰国後に彼が書いた文章や当時の新聞を手がかりに、簡単に紹介してみよう。

上海から船で長崎に入港したデュボイスは、新聞記者を含む大勢の人々の出迎えに戸惑いつつも、東京朝日新聞によれば、次のように語っている。

「私の考へてゐる結論は来る世界は有色人種と白色人種の対立と云ふ事で、有色人種が経済的精神的勢力を保有した暁には世界は有色人種の支配下に置かれるであらうと云ふ事です。[5]」

後述するように、日本を基本的に黒人と同じ有色人種の国家と捉えるデュボイスの立場がすでに鮮明に表れている。

長崎に寄港したデュボイスは、その日の内に同じ船で関西方面に向かい、神戸、大阪に数日滞在した後、京都、奈良を訪れる。その後列車で東京に向かい、約一週間の滞在後、帰国した。[6]

旅行中のデュボイスの行動は、奈良、京都、日光の神社仏閣の見学や歌舞伎見物といったいわゆる観光と、新聞社訪問、神戸女学院大学や関西学院大学、仏教大学、同志社大学、東京大学等の訪問と講演、外務省やペン・クラブ、国際文化振興会を含む各種団体主催の昼食会や晩餐会への出席に大別できる。講演の内容は、デュボイスによれば、「黒人文学と、アメリカン・デモクラシーにおける黒人の役割について」であったという。[7]

日本滞在中のデュボイスに最も強い印象を与えたのは、どのような見聞よりも、至るところで暖かく迎えられたことであった。

「私は、これまでにもさまざまな町や国でしばしば親切にしてもらったことがある。しかし、日本においてほど常に気配りや歓迎を示されたことはなかった。私がどのような公的な地位にもなく、ただの私的な市民として来日したこと、母国においてさえ歓迎されているとはいえないことを考えると、これはなおさら驚くべきことであった。[8]」

デュボイスによれば、「日本政府は、私に一セントも鉄道運賃を払わせてくれなかった」し、「外務省は、私のために晩餐会を開き、またあらゆる便宜を計ってくれた」。諸大学は「とりわけ親切」であった。デュボイスは、「芸者とすき焼きの宴会」というきわめて日本的なもてなしをも楽しんだようである。ホテルは「最上」であり、経営者は彼のために気を配り、その上「特別安い料金」にしてくれた。[9]

ホテルに関しては、とりわけデュボイスの心に残る出来事があった。

「最後の日に、私が東京の帝国ホテルで料金を支払っていると、大声でしゃべる典型的なアメリカの白人女性が割り込んできて、用事を言いつけた。アメリカであれば係の者はただちに彼女の方を向いて、彼女の応対をしないまでも、詫びを言うとか言い訳くらいはするところであろう。しかし、東京では違った。彼は目で合図もしなければ頭をめぐらせることもなかった。彼は注意深く私の応対を終え

ると、ゆっくりと日本式の丁寧なお辞儀をして、それからアメリカ人の方に向き直った。[10]」

たとえ著名な黒人指導者であっても、黒人であるかぎり白人と対等に扱われることのない国に生活するデュボイスにとって、これは胸のすくような思いがしたことであろう。

デュボイスが描く日本の旅は、どこまでものどかで善意に満ちている。しかし、彼の来日は、前述のように一九三六年の暮れのことであった。五年前の一九三一年に満州事変を起こした日本は、各国の非難の中で満州国建国を強行し、三三年には国際連盟を脱退、国際的孤立への道をたどっていた。一九三六年の二月には二・二六事件が勃発、八月には「国策の基準」「帝国外交方針」により、南方進出を含めた国家目標の基本方針が確認され、デュボイス来日の一週間ほど前には日独防共協定が調印された。そして、翌三七年七月には盧溝橋事件が起こり、ついに日中の全面戦争へと至る。南京大虐殺は、デュボイス来日からちょうど一年後のことであった。

デュボイス自身、日本に来る前に問題の満州国の視察を行っているのだが、そこから彼が引き出した結論は、徹底して日本に好意的なものであった。彼は、「満州国が独立した国家であるのか、それとも日本の植民地であるのかという問題は、取るに足りないものとして無視」し、「私にとって重要な問題」は次のことであるという。

「日本は、満州の人々に対し、何をどのように行っているのか？　日本は優者と劣者のカーストをつくりあげているのか？　多くの人々を隷属と貧困に陥れているのか？　土地を盗み、天然資源を独占しているのか？　満州の人々は、彼らの国にこの外国勢力が存在することで、以前よりも幸福であるのか不幸であるのか？[11]」

このような問いに対してデュボイスは、「私が今までに見たり読んだりしたいかなる植民地においても」満州ほど次のような現象が明らかであったところはない、と言う。

「（一）人種や皮膚の色によるカーストがないこと　（二）公平な法と秩序　（三）全体の福利のための私的な資本への公的規制　（四）健康や教育、都市計画、住宅供給、消費者の協同組合、その他の社会的目標のための事業　（五）行政や社会の再編成への現地の人々の編入」の諸点である。むろん、まだまだなすべきことも多いが、「四年間ですでに達成されたことを合計すると、驚異というほかはない。人々は幸せそうであり、失業はない。社会の治安と秩序は保たれている。満州国では、リンチなどというものは考えられないであろう[12]」。

デュボイスは、「本国と植民地」＝日本と満州の間には、「目に見えるような差別はない」と断言している。その理

由は、「日本人と満州国人が人種的にきわめて近い関係にあるので、人種的偏見は存在しないし、するはずがないからである」[13]（傍点筆者）。デュボイスの判断の最終的な拠り所は、人種の同一性であった。

デュボイスは、満州で松岡洋右満鉄総裁と会っている。「物静かで、ゆっくりと低い声でしゃべり」、「三千万人の運命をその手に握っている」松岡との三十分にわたる会見の様子について、彼は次のように書いている。

「われわれは、産業、資本主義、共産主義について語った。彼は、日本はいくつかの点で、現代の国家の中では最も共産主義的である、と述べた。日本には、多くの民族の特性である財産の個人的所有の強い意識は存在しなかった。すべての富を共有し、他者に分かち、公益のために犠牲となることも厭わないという強い意識がある、と。」

松岡の言葉に意を強くしたデュボイスは、思い切って大胆な問いかけをする。

「『あなたがた日本人は、国民の驚くべき規律によって、革命なしに日本を封建制から産業主義へと転換させることができました。もう一度革命なしに、同様の規律と無限の犠牲によって、日本が私的利益から公共の福利へのさらなる必然的な変化を遂げることは不可能でしょうか？[14]』」

この問いかけに松岡がどのように答えたのか、デュボイスは明らかにしていない。

デュボイスは、日露戦争時に日本軍が攻略した旅順港に立ち、日本が国際舞台に躍り出た日清戦争以後の四十年間を回想する。この戦争による遼東半島の獲得、三国干渉、ロシア、ドイツの進出、日露戦争を経て、第一次大戦後、状況が大きく変化した。満州国建設に至る経緯は、次のように説明されている。

「インド、香港、アフリカの半分とオーストラリア大陸全体を支配するイギリスに向かって、北アフリカとシリアを領有するフランスに向かって、メキシコの半分とプエルト・リコ、フィリピンと運河地帯を支配するアメリカに向かって、日本はこう言った。あなたがたがこれらの地域を必要とする以上に、わが国には満州が必要だ。今日、満州には政府が存在せず、徘徊する盗賊の手中にある。その土地と資源は、われわれの国家としての発展と拡大に絶対必要である。……あなたがたがわが国を制することのできない今、われわれが満州を獲得しなかったら、機会のありしだいあなたがたが奪うだろう、と。世界中の略奪品を貪っていたイギリス、フランス、アメリカは、他民族の領土の併合という問題について、突如としてひどく道徳的になった。駄目だ！と彼らは言ったので、日本は国際連盟を脱退し、満州を手に入れた。[15]」

史苑（第五四巻二号）

デュボイスは、満州の状況を判断するにあたって、一週間の滞在中「私は北と西と南の国境地帯、首都と主要な都市、多くの町を見た。私は昼夜の別なく通りを歩いた。役人と話し、産業施設を訪れ、報告書を読んだ」と、自信を持って述べているが、現地の一般の人々と話したとは書かれていない。[16] 松岡のような要人との会見が実現したことも、彼が特別の「客」であったことをうかがわせる。そのような立場のデュボイスが、どれだけ満州の現実に触れることができたかは疑問である。

日本国内の旅行中も、デュボイスは多くの人々と出会い、言葉を交わすが、それはすべて何らかの公職にある人や知識人との対話であった。一般の民衆については、京都から東京へ向かう列車の車窓から眺めた風景の一部として、「至るところで背を丸めて働く人たち」の姿を記しているにすぎない。[17]

すでに述べたように、デュボイスは日本で大いに歓待されたのであるが、歓迎されたがゆえに放っておかれることがなく、「どこへ行っても案内や通訳を買って出てくれる人がいたし、至るところで親切と思いやりを示してもらった」。そのために、日本が（あるいは満州の日本人が）見せたいものしか目にすることができなかったということもあろう。初めて日本の土を踏んでから「二週間後に横浜を出帆するまで、私は、私の滞在を快適なものにするためあらゆる努力を惜しまない偉大な国の歓迎された客であるということを、片時も忘れさせてはもらえなかった」という彼の言葉に、歓迎への感謝のみでなく、ある種の押しつけがましさに対する苛立ちやうんざりした気持ちが読み取れる。[18]

しかし、そうした事情を考慮してもなお、デュボイスの満州観は公平であるとは言いがたい。満州国建設に至る経緯の説明も、日本に対して好意的にすぎる見方である。だが、満州問題を含めての日本に対する好感情は、けっして日本での歓待への返礼 ――リップ・サービスではなく、むしろデュボイスが国際情勢を見る際の基本的な立場に由来するものであった。次にそのことを述べ、あわせて訪日以降の対日観をも追ってみたい。

二

第一次大戦中の一九一五年、すでにデュボイスは、この戦争がバルカン半島をめぐる争いなどではなく、西欧列強によるアフリカの富や資源の争奪戦にほかならないことを主張していた。レーニンとは関わりなく到達したこの結論は、すでに指摘した早くからの人種へのこだわりの所産で

あろう。[19]

以後のデュボイスは、ブローデリックらが述べているように、国際情勢や各国の対外政策を評価する際、社会主義（＝資本主義からの距離）と人種という二つの座標軸に拠ることになる。すなわち、世界を覆う帝国主義が資本主義の帰結であるという認識ゆえに、その国がどれほど反資本主義的であるか、換言すればどれほど社会主義に近づいているかということと、帝国主義の本質としての有色人種抑圧がどれほど行われているかということを評価の基準にしたのである。[20] そして、世界の全般的状況を、白人の先進資本主義国、とくにイギリス、フランス、合衆国が有色人種を支配、抑圧しているというシンプルな図式のもとに捉えていた。

しかしながら、このような図式にあてはまらない国がソビエト連邦と日本であった。ソビエト連邦は、デュボイスの見たところ、白人の国でありながら人種差別主義を免れている社会主義国であったし、逆に日本は、有色人種の国でありながら欧米の圧力に抗して独立を維持し、そればかりか日露戦争の勝利で「無敵のヨーロッパという伝説」を打ち砕いたからである。[21]

ソ連はその後、スターリニズムや独ソ不可侵条約でデュボイスを困惑させることになるのであるが、この史上初の社会主義国家は、彼にとって「未来の産業民主主義のための最も偉大な唯一の希望」であり続けた。[22]

デュボイスをより悩ませたのは、日本の動向であった。日本は「必然的にアジアの指導者」のはずであったが、現実には「中国に対する最も苛酷な抑圧者の一人」であった。[23] デュボイスは、日本を非難することによって、彼の基本的な図式 ――白人の帝国主義による有色人種の抑圧 ――が曖昧になることを恐れたのであろうか、満州事変後、列強の対日批判が高まると、「故意に流されるアメリカのプロパガンダ」によって誤った方向に導かれないようにと注意を促し、合衆国を含む列強の主張の欺瞞性を追求する。すなわち、それぞれ植民地を持ち、他民族を抑圧しているイギリスやフランス、合衆国が、「（列強の人種差別主義による閉め出しのために）軍国主義か自殺かの選択を迫られた日本に向かって『恥を知れ！』と叫ぶ」のは、「偽善の最たるもの」である、と彼は言う。日本は「ヨーロッパとアメリカが中国でおもに求めているのは、金儲けの機会であ」ることを知っており、満州が日本の手に落ちないとしても、代わりに欧米の搾取は免れないと示唆している。[24]

デュボイスには、中国人の敵意が欧米よりも日本に多く向けられていることが、どうしても理解できなかった。来日直前に上海で彼らと会談した折に、「あなたがたは、日

本よりもイギリスやフランス、ドイツにより多く苦しめられてきたのに、なぜヨーロッパよりも日本を憎むのか」と、きわめて率直に質している。日本が中国の独自の発展を妨げているという彼らの答えは、デュボイスを納得させることはできなかったようである。[25]

来日の一年後、日中の全面的な戦争状態の中で、デュボイスの日本擁護は頂点に達する。彼によれば、「この戦争の原因と責任はイギリス、フランス、アメリカに、ドイツとイタリアに、百年以上にわたり、殺戮と略奪によって有色民族にその支配を強いてきたすべての白人国家にあ」り、「アフリカ奴隷貿易と産業革命」にまで遡ることができる。アジアの支配に着手した欧米の前に立ちふさがった日本が「自由への道」を中国に示したのに、中国は欧米に追従することを止めず、日本を「嘲笑し、日本人は悪魔だと自国民に教えた」。「かくして、黄色人種による世界制覇へとまっすぐに続く道は、合衆国で『白人のための黒んぼ』を生み出したのと同じ精神によって、アジアで台無しにされてしまった。そこで日本は、中国をヨーロッパから救うために中国と戦い、中国を通じてヨーロッパと戦い、アジアの自由に向けて血の海を渡ろうとしたのである。[26]」

日本と中国のこのような敵対関係は、デュボイスの心を傷ませ続けることになるが、彼は、やがては両国が「堅い同盟を結び、有色人種のために世界を救う」ことを期待し、あくまでも人種による連帯感に望みをかけた。[27]

その後の日本の辿った道が、デュボイスの期待を裏切るものであったことは周知のとおりであるが、にもかかわらず、彼は日本を擁護し続けるのである。合衆国内で対日戦の論議が高まるにつれ、彼の批判は、合衆国の立場や戦争目的を正当化する人々に向けられるようになる。

「……日本のどのような運動に対しても、その動機の如何にかかわらず、わが国の若干の人々の過剰な批判が向けられるということが、ほとんど習慣となっている。しばしばこれらの人々は、世界の中でアメリカが自己防衛を必要とし、またその資格がある唯一の国ではないということにけっして気づかないように思われる。彼らは、自分たちの行動と発言はすべて健全で議論の余地のないものであるが、他人のそれは常に正しくないと思っているようだ。[28]」

彼は、この立場から日本の南進にも理解を示し、誤解を招きかねない表現をしている。

「これらの島々（注：オランダ領東インド諸島）は、もちろんアジアにあり、日本に近く、その生産物は日本の存続にとって不可欠である。ところが、合衆国とヨーロッパが、何千マイルも離れた所から日本に対してそれに触るなと警告しているのである。あたかも日本が合衆国に対して

キューバに干渉しないようにと警告しているようなものである。[29]」

デュボイスは、このような合衆国の態度こそが日本をドイツの側に追いやり、戦争の危険を増大させているのだと言う。そして、対日戦を主張する人々の目的は民主主義のためなどではなく利益と搾取のためであり、人種的偏見に基づくものであるとして、対日批判に協力してほしいというスティムソン国務長官の要請に対しても、日本が正しいわけではないが、かといって合衆国が正しいわけでもない、として拒絶する。[30]

デュボイスの反対も空しく、ほどなく日米の間に戦端が開かれることになるが、戦争の末期、この戦争に至る経過を総括したデュボイスは、なお日本よりも欧米に責任を負わせた。すなわち、列強と肩を並べるようになった日本に対し、「世界と西欧文明は、黄色人種の人種的平等を承認せず、日本を完全な仲間として受け入れようとはしなかった」。そのために日本は「しだいに方向を転じ、アジアの覇権に向かいはじめた」。そして日本の帝国主義がドイツ、イタリアとの間に共通項を見出した時、「大戦は不可避であった」と。[31]

三

これまで見てきたように、デュボイスの対日観は来日の前と後とを問わず、一貫して日本に好意的なものであった。本節では彼の対日観を規定した諸要因を、彼の思想の特徴と絡めて考察してみたい。

デュボイスの日本に対する高い評価は、すでに述べたように、日本が有色人種の国でありながら、欧米に伍して強国化した事実のゆえであった。欧米と変わらぬ他民族抑圧を伴った日本の帝国主義も、その担い手が有色人種であるということで、欧米のそれとは峻別された。後知恵によってわれわれが現在知っている事実をデュボイスが知りえなかったとしても、彼の言葉の端々には、日本の政策の非を認識していたことが明らかである。したがって、近代以降の歴史を白人の欧米諸国による有色人種の抑圧、収奪の歴史として捉えていたデュボイスは、いまひとつの人種主義によってアジアへの日本の侵略を容認したといえる。そのような行為は、同じアジア人として、彼らが「人種的にきわめて近い関係にある」「従兄弟」であるからには、本来起こりうるはずのないことであった。[32] デュボイスの人種観にはある意味で観念的なところがあり、白人の人種差別主義への対抗において、有色人種の人種的連帯をあるべきも

のとしてア・プリオリに仮定していた。[33] 有色人による有色人の抑圧という、その仮定から外れる事実に遭遇した時、彼は仮定自体を見直そうとはせず、黒人の人権を擁護する運動家としては大きな矛盾を抱え込むことになった。

デュボイスの思想や行動が多くの矛盾をはらんだものであったことは最初に指摘したとおりであるが、彼が民主主義や個人主義の価値を信じながら、一方では全体主義のいくつかの側面に惹かれていたこともそのひとつである。アングロサクソン中心主義への反感も手伝ってか、若い頃のデュボイスはドイツに親近感を持っていたが、ビスマルクを評価していた点に権威主義的傾向が看取される。これは、デュボイスが強く影響された一九世紀ブラック・ナショナリズムの集団主義とも調和するものであった。[34]

このような傾向が、後にナチズムの反ユダヤ主義はもちろん否定しつつも、ナチスの下でドイツが経済的発展を遂げたことに対して一定の評価を与えたことにつながる。合衆国の黒人指導者としての長く苦しい体験から、デュボイスは、改革の実をあげるためには多少の強制を伴ってでも多様な利害を統合し、ひとつの目的に向かって効率よく力を結集させる必要があると考えていたのであろうか。彼は、日本のめざましい発展の陰にも「チームワーク」が必要とされ、「厳しい規律」や「自由の犠牲」、「厳しい抑圧」などを伴ったことを指摘し、「しかしそれはなし遂げられ、日本はそれを誇りに思っている」と、述べている。[35]

このことは、デュボイスにおける共産主義や社会主義の理解の問題とも関連してくる。先に述べた松岡洋右との会見の様子は、デュボイスが「明らかにファシズムの全体主義と共産主義のそれとの表面的な類似性によって、混乱していた」ことを裏付けているようにもみえる。[36] デュボイスは、日本の産業が私的利益を追求する資本家集団に支配されていることに懸念を抱き、それでは欧米列強と同じ道を歩むことになってしまうと考えた。

「……日本は資本主義の危険を忘れている。抑制のない生産は無限には続かない。安価な労働は、その上に繁栄を築こうとする国にとって、結局安くはない。もし今日の日本が誘惑を退けて、自国の労働者の生活水準を引き上げるならば、日本はそれでもなお世界と競合できるし、同時に世界史上最も知的で有能な労働者群を育成することができるであろう。[37]」

しかしながら、当時の日本社会に社会主義や共産主義へと向かう兆候を見出そうとするのは、どう見ても無理なことであった。デュボイスは、晩年次のように回想している。

「今世紀の悲劇は、日本が西欧流のやり方をあまりに速くかつ巧みに習得し、アジアからヨーロッパへと宗旨替え

をしたことにあった。……日本はアジアと世界を新しい時代に導くことができたかもしれない。しかし、この国の頑迷な指導者たちは、東洋を支配するために西欧の帝国主義を利用し、西欧の金儲けが東洋の理想主義に取って代わったのである。[38]」

有色人種による社会主義国家というデュボイスの夢を実現したのは、皮肉にも日本ではなく中国であった。しかし、少なくとも第二次大戦の頃までは、デュボイスは、国民的なまとまりを欠き、欧米の資本に支配されながらなお日本の侵略を食い止めるために欧米の力を借りようとする中国よりも、欧米に挑戦する日本の方により多くの親近感を抱いていた。「日本の意味」と題するコラムの次の言葉は、デュボイスにとって日本がどのような意味を持つ存在であったかということをはっきりと教えてくれる。

「それ（注：日本）は、何よりも有色人種のために有色人種によって営まれる有色人種の国である。……私が話をした日本人は例外なく、白人世界に立ち向かう民族として、自分を中国人やインディアン、黒人と同じ仲間に入れていた。私は生まれて初めて、直接的にも間接的にも白人に支配されていない国に立っていた。[39]」

デュボイス自身は、来日時の歓待の意味を、次のように捉えていた。

史苑（第五四巻二号）

「それはアメリカの黒人に向けられたものであり、私はその非公式の代表と見なされたのである。日本はこの歓待によって得るものは何もなかった。私はまったく影響力のない人間であるし、国に帰れば地位も基本的な権利もない。富や権力を約束したわけでもない。しかし日本は、同様にまったく非公式にではあるが、当局の理解と是認の上で、私を通じて千二百万の人間に、日本は共通の兄弟愛、共通の苦難、共通の運命を認めているのだと言おうとしてくれたのである。このことは、この歓待のあらゆる場面で暗黙の内に表明されており、また多くの人々から率直にはっきりと語られたのである。[40]」

デュボイスが有色人であるゆえに歓待されたのは事実であるが、それは彼の言うように黒人との連帯を表明するためではなく、より現実的な政治的意図によるものであった。最後にそのことを述べたい。

四

日米間の緊張がしだいに高まるにつれ、一貫して日本の立場に理解を示し、その政策を擁護するデュボイスに、疑惑の目が向けられるようになる。一九三九年の初め、デュボイスが「この国における日本のプロパガンダ工作のため

に、資金の提供を受けている」という噂が流れた。これに対しデュボイスは、次のように反論している。

「……私は、日本やいかなる日本人からも一セントたりとも受け取ったことはありません。が、それにもかかわらず日本を信じています。それは、私が中国に同情を寄せていないということではなく、ヨーロッパとアメリカの白人のプロパガンダを、略奪と侮辱をより憎悪しているということです。私は、アジア人のためのアジアを信じ、戦争の地獄模様と資本のファシズムにもかかわらず、日本がこの目的のための最良の担い手であると考えています。[41]」

デュボイスについての噂の根拠となったのは、彼の「演説が、この国での日本の公式の宣伝機関によるプロパガンダと一致する」ことであった。[42] デュボイス自身も否定していないように、それは事実である。たとえば、一九三七年六月から三九年一月までの一年半（この間に日中戦争が始まり、大東亜新秩序宣言が出された）と、四十年七月から太平洋戦争直前の四十一年十月までの時期に首相を務めた近衛文麿は、一九一八年に『日本及日本人』誌上に「英米本位の平和主義を排す」という論文を載せている。その中で近衛は、英米の主張する「民主主義人道主義」の背後に「多くの自覚せざる又は自覚せる利己主義」が潜んでいることを指摘している。第一次大戦は「既成の強国と未成の強国との争」、「現状維持を便利とする国と現状破壊を便利とする国との争」であり、「早く既に世界の劣等文明地方を占領して之を植民地となし、其利益を独占して憚らざりし」英米は、その利益から「平和を叫」んでいるにすぎず、「何等正義人道と関係なきもの」である。したがって、「領土狭くして原料品に乏しく、又人口も多からずして製造工業品市場として貧弱なる我国」は、「英国が其植民地を閉鎖するの暁」には「自己生存の必要上戦前の独逸の如くに現状打破の挙に出でざるを得」ない、と近衛は主張する。さらに近衛は、「かの合衆国を初め英国植民地たる豪州加奈陀等が白人に対して門戸を開放しながら、日本人初め一般黄人を劣等視して之を排斥しつつある」ことを指摘し、「差別的待遇の撤廃」を訴えている。[43] 近衛の反英米主義、「持たざる国」としての「現状打破」の肯定＝大陸進出の正当化、英米の人種差別の指摘は、少なくとも表面的にはデュボイスとの間に共通項を見出せるものである。[44]

一九三〇年代の日本では、近衛の見方の延長線上に、ワシントン体制が欧米、とりわけ英米の支配する体制とされ、普遍的国際主義は「それを隠蔽するイデオロギー」と位置づけられていく。[45] そして「現状打破」のイデオロギーとして、「東亜新秩序」が唱えられるようになる。このイデオロギーが発展し、大東亜宣言として明文化された一九四三

年一月の大東亜会議では、「血」の結びつきによるアジアの団結が強調されるのである。[46]

こうした中で、個人主義、自由主義のような英米の価値観自体が否定され、個人主義の帰結として理解された資本主義も攻撃の的になる。反資本主義が共産主義の信奉につながったわけでないことは言うまでもないが、集団への帰属の重視とあわせて、同じく資本主義への敵意を強めていたデュボイスに、ある種の期待を持たせる要因となったのかもしれない。

さらに重要なことは、合衆国の人種差別が、日本人移民の問題を通じて多くの日本人にとって周知の事実となったことである。カリフォルニアの日本人移民排斥に始まるこの問題は、一九〇六年の日本人学童隔離事件で緊張が高まったが、日本側の自主的な移民制限により、いったん沈静化したかに見えた。しかし第一次大戦後のパリ講和会議で、国際連盟規約に人種平等条項を盛り込もうとした日本案は、ウィルソン大統領らの反対によって不成立に終わった。さらに一九二四年の移民制限法の排日条項によって日本人移民が全面的に禁止されたことは、日本国内に激しい反発を呼び起こした。この問題が両国の関係を直接悪化させたわけではないが、合衆国が人種差別の国であるというイメージは、日本人の間に広く行き渡った。

しかし、ここで注意しなければならないのは、この人種差別が有色人種一般に対する差別というより、もっぱら日本人に対する差別として捉えられていた点である。一九二四年の排日移民法に対しては、親米的な自由主義者のグループからも強い抗議の声があがったのであるが、それは「人種の平等や少数民族の権利を尊重する自由主義的信条」よりも、「日本の国威に対する屈辱として、彼等のナショナリストとしての矜持を傷つけたこと」により多く由来していた。[47]

この時期には、小林政助の『米国ト人種的差別ノ研究』（一九一九年）、綾川武治の『人種問題研究』（一九二五年）等、合衆国の人種差別に関する著作が出版されているが、小林の著作は日本人移民を扱ったものであり、綾川も多くのページをこの問題に割いている。[48] また、一九三二年に出版された四至本八郎の『是でも米国か』は、合衆国の社会事情全般を批判的に紹介したものであるが、ここでも大半を日本人移民の問題が占めている。[49]

さらに、合衆国の黒人問題自体を論じた著作としては最も初期のものとされている満川亀太郎の『黒人問題』（一九二五年）にしても、序文に述べられているように、「奪はれたる亜細亜を奪還せんがために」、「十年同志を天下に求め、聊か心身を労して来た」著者が、「亜細亜と同じ

く搾取せられたる阿弗利加、黄人と同じく圧虐せられたる黒人」への同情から書いたものであり、佐藤宏子氏が指摘するように、「東洋の盟主としての日本の地位を願う」著者の意図が鮮明である。[50]

日本人による合衆国の人種差別の告発は、単なる黒人への同情に由来するものではなく、有色人種全般に対する差別への憤りに基づくものでもなく、他の有色人はともかく、世界の一等国たる地位を占めた日本人が、その皮膚の色ゆえに差別されるのは許容できない、という感情によるものであった。そのことは、公式にはアジアの連帯を唱えていたにもかかわらず、この時期の日本が「日本民族」をアジアの指導者として優越的な立場に置き、国の内外を問わず他のアジア人を差別し、抑圧し、迫害した事実に明らかである。

しかしながら、世界に向かって民主主義を説く合衆国にとって、黒人に対する差別が最大の弱点であったことは事実であり、日本側がこの点を積極的に利用しようと考えるのは当然であった。日本の対米プロパガンダにおいてこの点が強調されたことは言うまでもなく、一九三〇年代半ばに、高橋少佐と名乗る諜報員を通じて、エライジャー・ムハマド（Elijah Muhammad）の率いる「ブラック・モスリム」と関係を結んだり、「ハーレムのヒトラー」と呼ばれた黒人指導者ロバート・ジョーダン（Robert O. Jordan）に接近するといった黒人コミュニティへの働きかけも行われていたようである。[51]

ダワーによれば、このような対黒人宣伝工作よりもむしろ「支配的な白人の体制に真向から敢然と挑戦」し、「白人の全能という神話」を打破した日本の行動こそが黒人に強く訴えたというが、デュボイスの場合もその例に漏れない。[52]

いずれにせよ、このような背景の中にデュボイスの来日を置いてみるならば、彼に対する歓迎の意味は明白である。著名な黒人指導者であり知識人であるデュボイスは、日本にとってみればけっして「影響力のない」人間ではなかったし、デュボイスを歓待しても「得るものは何もない」と考えたはずはないのである。[53]

このことは、たとえば次のような事実と重なりあう。すなわち、満州事変の頃に書かれた河村只雄の『米国黒人の研究』は、学問的に高い評価が与えられるべきものであり、黒人の状況に著者が深い同情を寄せていたことをうかがわせる「日本最初の本格的な黒人研究」である。しかし、この著作が著者の死後、一九四三年になって「今や崩れ行く旧文化が、宿命的に内包してゐる差別見、彼等の魂に巣喰ふ先天的ともいふべき不正義」を「世界の不幸の原因……

又今次の大戦の原因」と考える伊東延吉他一名の序文をつけて「我が銃後の読み物として、立派にその役目を果すべきものなるを信じ」て出版されていることは、偶然ではない。[54] デュボイス自身の著作『黒人論』（*The Negro*,1915）の邦訳が、やはり太平洋戦争中の一九四四年に出版されていることも同様である。[55] デュボイスの発言や行動も、本人の意志にかかわりなく、当時の日米関係の文脈においては特別の意味を帯びることになった。

五

すでに今世紀の初頭、「二十世紀の問題は、カラー・ラインの問題である」と、人種を基軸に世界を考えていたデュボイスと、後発の資本主義国としてひたすら富国強兵の道を歩んだ日本とは、英米を中心とする白人西欧文明への敵意というただ一点において、不幸にも結びつき得た。[56] デュボイスの認識の甘さや矛盾を指摘し、日本の宣伝活動に利用された彼の不明を批判するのは容易なことである。しかし、圧倒的な白人至上主義の時代に白人至上主義の国に生を享け、西欧的価値観の中で西欧流の教育を受けつつ、なお有色人種の能力や人種的独自性を主張しなければならなかったデュボイスにとって、繰り返して言うが、日本は希望の星であった。明治維新後のごく短い期間に近代化を遂げて列強と肩を並べるまでになり、しかも西欧の技術文明は採り入れながら、西欧文化と異なる独自の精神を維持しているかのようにみえた日本に、彼はアジアを導いていく国として大きな期待を抱いたのである。

日本がちょうど国際連盟を脱退した頃、デュボイスは、日本が技術援助や貿易、友好関係の樹立とひきかえに、エチオピアに千六百万エーカーの土地の譲渡を受けるという内容のニュースを耳にして、「われわれは、この問題に関する日本の動機にいささかの幻想も抱いてはいない。彼らは利益を目的としてエチオピアに行くのである」と断りつつも、「もしこのニュースが真実であるならば、大変喜ばしい」と述べている。そして、日本と中国、インドが、さらには黄色人種のアジアと黒人のアフリカが一致した目的をもって結びつくならば、「世界に新しい時代が到来し、血迷った一人種の鼻持ちならない支配が終わりを告げるだろう」と続けているが、日本の真意のありかを承知の上でなお有色人種の連帯を夢見るデュボイスの姿は、痛ましくさえある。[57]

デュボイスの対日観が矛盾に満ちているとするならば、それは西欧近代の歴史の根底にある人種差別主義そのものが、彼をそのような立場、すなわち人種というものを基軸

に物を考えざるをえないところまで追いやり、人種による攻撃に人種をもって対抗させようとしたのだと言えないだろうか。日本がアジアの一国としていかに振る舞うべきかということは、いまなおわれわれの課題である。われわれは、デュボイスの期待に十分答えていると胸を張ることはできないであろう。

註

(1) William E. B. Du Bois, *The Autobiography of W. E. B. Du Bois: A Soliloquy on Viewing My Life from the Last Decade of Its First Century* (Herbert Aptheker, ed.), New York, 1968, p.100

(2) *Ibid.*, p.206.

(3) August Meier, *Negro Thought in America, 1880-1915*, Ann Arbor, 1960, p.206; Arnold Rampersad, *The Art and Imagination of W. E. B. Du Bois*, New York, 1990 (originally published in Cambridge, Mass., 1976), p.292.

(4) Manning Marable, *W. E. B. Du Bois: Black Radical Democrat*, Boston, 1986, p.154-155; 旅程は、Chronology, in Du Bois, *Writings* (Nathan Huggins, ed.), New York, 1986, p.1298 による。

(5) Du Bois, "A Forum of Fact and Opinion," *Pittsburgh Courier*, (以下、"Forum" *P.C.* と略記) March 13, 1937, 『東京朝日新聞』昭和一一年一二月三日。

(6) Du Bois, "Forum," *P.C.*, March 13, 1937; 『大阪朝日新聞』昭和一一年一二月四日、『東京朝日新聞』昭和一一年一二月一一日。

(7) Du Bois, "Forum," *P.C.*, March 13, March 20, 1937; 『東京日日新聞』昭和一一年一二月一二日、『大阪朝日新聞』昭和一一年一二月四日。なお、『関西学院新聞』昭和一一年一二月二十日号によれば、同校での論題は、「黒人文学に就て」と「日本青年に興ふ」であったという。

(8) Du Bois, "Forum," *P.C.*, March 13, 1937.

(9) *Ibid.*

(10) *Ibid.*

(11) Du Bois, "Forum," *P.C.*, Feb. 13, 1937.

(12) *Ibid.*

(13) *Ibid.*

(14) *Ibid.*

(15) *Ibid.*

(16) *Ibid.*

(17) Du Bois, "Forum," *P.C.*, March 13, 1937.

(18) *Ibid.*

(19) Du Bois, "The African Roots of the War," *Atlantic Monthly*, Vol. CXV (May, 1915), pp.707-714; Rampersad, *op.cit.*, p.262.

(20) Francis L. Broderick, *W. E. B. Du Bois: Negro Leader in a Time of Crisis*, Stanford, 1959, p.191, 196; Rampersad, *op. cit.*, pp.225-226.

(21) Du Bois, *Black Folk: Then and Now,* reprint of the 1939 ed.,New York,1975,p.368.

(22) Du Bois, "As the Crow Flies," *Amsterdam News* (New York),April 12,1941, in Broderick,*op.cit.*,p.193.

(23) Du Bois, "As the Crow Flies," *Crisis,*Vol.34, no.4 (June,1927).

(24) Du Bois, "As the Crow Flies," *Crisis,* Vol.39, no.4 (April,1932); "Postscript," Crisis, Vol.39, no.3 (March, 1932).

(25) Du Bois, "Forum," *P.C.*,Feb.27,1937. デュボイスの自伝における回想では、「アジアを裏切ったことに対する日本人の憎悪が存分に力説された」とある。Du Bois, *Autobiography,* p.46.

(26) Du Bois, "Forum," *P.C.*,Sept.25,Oct.23,1937.

(27) Du Bois, "Forum," *P.C.*,Oct.23,1937.

(28) Du Bois, "A Cronicle of Race Relations," *Phylon,* Vol. II (1941),p.401.

(29) Du Bois, "A Cronicle of Race Relations," *Phylon,* Vol. I (1940),p.274.

(30) Broderick,*op.cit.*,pp.195-196; Herbert Aptheker,ed., *The Correspondence of W. E. B. Du Bois,* 3vols., Amherst, 1973-78, Vol. II,pp.205-206.

(31) Du Bois, *Color and Democracy,* reprint of the 1945 ed.,New York,1975,p.6.

(32) Du Bois, "Forum," *P.C.*,Feb.13,Sept.25,1937.

(33) 拙稿「初期デュボイスの人種意識—『人種の保存』を中心に—」『史観』第一二七冊、平成四年、六六頁。

(34) 同前、六一頁。

(35) Du Bois, "Forum," *P.C.*,March 27,1937.

(36) Rampersad,*op.cit.*,pp.226-227.

(37) Du Bois, "Forum," *P.C.*,March 27,1937.

(38) Du Bois, *Worlds of Color,*New York,1959,pp.69-70, cited in Michael T. Martin and Lamont H. Yeakey, "Pan-African Asian Solidarity: A Central Theme in Du Bois' Conception of Racial Stratification and Struggle, " *Phylon,*Vol.XVIII(1982), p.209.

(39) Du Bois, "Forum," *P.C.*,March 20,1937.

(40) *Ibid.*

(41) Waldo McNutt to Du Bois, New York, Feb.13, 1939, Du Bois to McNutt, Atlanta, Feb. 25, 1939, in *Correspondence,* Vol. II, pp. 184-185.

(42) *Ibid.*

(43) 近衛文麿「英米本位の平和主義を排す」『日本及日本人』第七四六号、一九一八年一二月一五日、一三—一六頁。

(44) 近衛とデュボイスの共通項を考える時、入江昭氏の次の指摘は興味深い。「近衛の反英米主義における第三の要素は、日中関係に対する極めて浅薄な見方である。近衛は、中国人も日本と同じように英米支配に憤りを感じ、日本が善意と和解の精神を充分に見せれば、中国も日本の新アジア建設に協力するに違いないと信じていた。重慶政府も根本的には反英米であり、したがって日本としても、国民党指導層に反日抵抗を中止させ、対日協力を促し、新アジア秩序の夢を理解さ

せるのは困難ではなかろう、というのである。近衛や彼の取巻きが、中国における反日運動という現実になぜそれほどまでに盲目であったかは理解しがたいが、根本的にはそれも反英米的アジア主義の反映にすぎなかった。」入江昭『太平洋戦争の起源』（東大出版会、一九九一年）一五七頁。

(45) 三谷太一郎「国際環境の変動と日本の知識人」細谷千博他編『日米関係史』4（東大出版会、一九七二年）所収、一六四頁。

(46) John W. Dower, *War without Mercy: Race and Power in the Pacific War*, New York, 1986,（邦訳は、猿谷要監修、斎藤元一訳『人種偏見』TBSブリタニカ、一九八七年）p.6.

(47) 緒方貞子「国際主義団体の役割」細谷千博他編『日米関係史』3（東大出版会、一九七一年）所収、三二一頁、三四五頁。

(48) 小林政助『米国ト人種的差別ノ研究』（文川堂書店、大正八年）、綾川武治『人種問題の研究』（倉橋書店、大正一四年）

(49) 四至本八郎『是でも米国か』（新光社、昭和七年）

(50) 満川亀太郎『黒人問題』（二酉社名著刊行会、大正一四年）「題言」三頁。佐藤宏子「日本人の人種観と黒人問題」『東京女子大学付属比較文化研究所紀要』第三四巻、昭和四八年、三五頁。本田創造「ある黒人問題の本」『アメリカ社会と黒人』（八月書店、一九七二年）所収参照。

(51) Dower, *op.cit.*, pp.174-175.

(52) *Ibid.*, p.175.

(53) Du Bois, "Forum," *P.C.*, March 20, 1937.

(54) 河村只雄『米国黒人の研究』（藤井書店、昭和一八年）伊東延吉による序、一―二頁。佐藤宏子「河村只雄著『米国黒人の研究』紹介」『東京女子大学付属比較文化研究所紀要』第三九巻、一九七八年、六五―七三頁。

(55) W・E・バーガート・デュボア著、井上英三訳『黒人論』（博文館、昭和一九年）

(56) Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches*, Chicago, 1903, in *Writings*, p.359.

(57) Du Bois, "Postscript," *Crisis*, Vol. 40, no. 12 (Dec.1933), p.293.

〔付記〕本稿は、一九九二年度早稲田大学特定課題研究「アメリカ黒人解放運動における黒人知識人の問題」の研究成果の一部である。

（早稲田大学）